国立国語研究所学術情報リポジトリ

新聞記事に見る102年前の言語生活

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-06-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新野, 直哉 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003360

1.「言語記事データベース」の意義

・「表現に対する意識」という観点からの探究を考えた場合、実例などを確認する言語的な集計資料だけでなく、コラムや時評といった、どちらかといえば風俗史的な資料を扱うこともまた考えていかねばならないと思われる。（梅林2012：79）

・{「わたし的」や「気持ち的」のような、「～的」の新用法に関し} 新聞や一般雑誌の記事の中で触れられている例は少なくないのかも知れないが、それらに当たるのは必ずしも容易なことではない。（金澤2005：92）

＊新聞、一般雑誌の言語関連記事は、当時の言語状況、言語意識を知るうえで有益であるが、データベース化が進んでいる学術論文と比べ、必要な記事を検索することは古いものほど難しい。新聞・　雑誌の言語記事データベースは、研究資料として、また言語生活史資料として意義がある。

2.「新聞記事データベース」の概要

◆言語記事データベースは新聞記事、雑誌記事（大正～昭和期の雑誌『文藝春秋』が対象）の二種類があるが、今回は新聞記事の分について説明する。

◆大正2・6・10・14年の『読売新聞』を対象とし、記事データベース『ヨミダス歴史館』収録の紙面の画像から目視により記事の採集を行う。

◆「ことばについての意識・意見・解説や、ことばをめぐる状況などを伝えている記事」が対象となる。

◆データはExcelの表。掲載日・面・段・記事名・執筆者等の基本データに、分野を示すコード、「語誌データベース」の検索キーとなるキーワードを付加。

◆4年分のデータがそろえば、分野による記事の増減という大正期における変遷も見ることができる。

3.「新聞記事データベース」収録の記事から―大正6（1917）年の言語生活をのぞく―

○方言に関する記事

◆三色「一日一信」（6.22）

「かみがたの人と、水戸近傍の人」との「淡い争ひ」の例を次のように示す。

・一方ではつたいと言へば、他では麦こがしといふ。物の名詞にしてからが、東北は粗雑で卑野だと一方が嘲つて、米をうちまき、おからを卯の花なぞと、殿上言葉まで持ち出して笑ふこともある。

魔よけのために米をまいたことから、米そのものをも“うちまき”と呼ぶ方言は、『日本方言大辞典』によれば三重県、奈良県に見られる。また同辞典によれば“はったい”は広く西日本に分布している。

○ローマ字に関する記事

◆哀果（土岐善麿）「一日一信」（2.13）

ローマ字論者で、のちには国語審議会会長を務めた筆者が、「僕等はずつと前から書信の八分通り迄宛名を全部ローマ字で書くことにしてゐる」とし、配達係に対しては「お手数をかけてすまない」とはしながらも、

・配達夫諸君もみづからローマ字を読み習ふ結果にもなるだらうし、それも配達の休み時間位に簡単におぼえてしまへるほどのものだから、その欲求を促す方法としても、僕等の試みをゆるしてもらひたい。

と、かなり我田引水気味の弁明をする。これは、当時ローマ字の宛名でも手紙が配達されていたことを示す記事でもある。

○流行語に関する記事

◆N.N「一日一信」（8.8）

第一次世界大戦の影響による好景気の恩恵を受け短期間で大きく財産を増やした実業家を指す“成金”という語について、「近頃の新聞には殆どこの文字を見ぬ日とてはない」「やがては世界的にならうとまで云はれる」とし、さらにこう述べる。

・元来此語は最近の造語でなく、昔からあつたのださうである。「言海」や「辞林」にないのは、其言葉はあつても、あまり事実がないので行はれなかつたものらしい。{中略} それにしても「ハラキリ」「ゲイシヤ」「ナリキン」、何れも世界語になつた日本語にあまり名誉なものはない。

当時“成金” という語が人々にどう受け取られていたかを知るヒントになる記事である。さらに、当時『言海』『辞林』が代表的な国語辞書として認識されていたこと、そしてどのような語が「世界語」になったとみなされていたかをうかがわせる記事でもある。

○人名に関する記事

◆無記名コラム「お茶請け△家族の名が和歌」（6.9）

大分の「侘しい里」に、戸主が「ゆき」、その妹が「タゴノウラ」、弟が「内出見白妙野」と「降筒」、という名の一家があると報じる。並べ替えると「田子の浦打ち出でて見れば白妙の――雪――降りつつ」となるわけである。事実とすれば、近年取り沙汰される「キラキラネーム」どころの話ではない。

◆無記名コラム「銀座閑談」（9.12）

「東大の金井延博士」の子どもの名が、「長男が経彦で長女が国子、次女が済子で次男が民彦、夫れから三女正子三男義彦四男勝彦五男利彦」となっていて、「経国済民、正義勝利の八字に博士の抱負を表はしてゐる」ことを紹介する。それぞれの名前自体は難読でも珍しいものでもないが、少子化の今日ではまず考えられない話である。

○敬語に関する記事

◆子供向けコーナー「コドモシンブン　言葉遣ひ」（7.1）

言葉がぞんざいだと祖母に小言を言われた「波子さん」が、それなら「お水」「お便所」「お着物」と言えばいいんでしょう、と反抗した（？）のに対し、「昔気質のお祖母」が「お冷」「お潅所」「お召」と言い直させた、という話。

○その他の記事

◆無記名コラム「お茶請け」（1.24）

フランス語で料金を尋ねる際は「コンビアン」と言うべきところを、ある日本人女性が「コン畜生」と覚えてしまい、パリで乗合馬車の御者に対しそれを繰り返したため一向に話が通じなかった、という笑話。

◆佐藤梅園「手紙の礼儀」（9.26）

・近来我国の手紙殊に若い御婦人達の手紙はペンを用ひる傾向があつて、自然文体まで長上も友達も見さかひがありません。同輩間なら未だしも、少し礼儀だつた手紙の整つて居らぬには驚きます。

「今の若い人は手紙もちゃんと書けない」という定番のボヤき文句が、この時代からメディアに出ていたことがわかる。

※参考文献
梅林博人（2012）「「全然」再考―迷信、アプレ、前提の否定など」『相模国文』39
金澤裕之（2005）「「～的」の新用法について」『日本語科学』17